

? 東南アジア 10 マレーシア モザイク模様の娯楽

著者	鳥居 高
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	90
雑誌名	「あそび」と「くらし」：第三世界の娯楽産業
ページ	67-81
発行年	1994
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017785

10 マレーシア

モザイク模様の娯楽

鳥居 高

マレーシアの娯楽あれ

これ——都市と農村

マレーシアの娯楽と娯楽産業を見るために首都クアラルンプルとその郊外へと一日足を伸ばしてみることにしよう。

クアラルンプルの朝は午前七時近く、イスラム教徒に第二回目のお祈り(ヘシユルク)を呼びかける声(アザーン)で始まるといえる。眠たい眼をこすりながら台所へ向かう筆者の耳にまず入ってくるのは、アパートの窓の下を流れるクラン川の河原でサッカーに興じる少年たちの声である。さらに視線を移動させると、近くの小学校の校庭ではマレー系の少女たちが頭部にミニ・トゥルコンと呼ばれるスカーフ状の布を巻いたままでバスケットボールを追っかけている姿が眼に入ってくる。

スポーツは庶民の重要な娯楽のひとつである。なかでもサッカー、バドミントンは最も人気

のあるスポーツといつてよい。自身で楽しむだけでなく共にセミプロのチーム・選手がおり、見るスポーツでもある。

さてマレーシアのオフィスアワーは早い。官庁の場合八時十五分には職員は出勤している。しかし役所が開いていることと業務が行われていることとは同義ではない。出勤途中あるいはいったん出勤してから、まず最初にすることは職場の近所の屋台やコーヒー屋で「朝のお茶」の用意を整えることである。ココナツミルク入りの色彩豊かなお菓子、バナナのでんぷら、焼きビーフンなどをビニール袋に詰めて職場に戻り、朝のお茶が始まる。

お茶とお菓子を囲んで世間話が延々と続く。昨日の職場のできごとや家族や友人の消息にはじまり、政治談義、有名人の消息など話題は際限なく広がり、つきることはない。端からみればきわめて非能率的にみえるこうした行いもマレーシアの人々にとっては大きな楽しみとなっている。

こうしたお茶とおしゃべりによる娯楽は農村部では生活にとってより重要な地位を占めている。村のあちこちで見かけるコーヒーショップでは、朝の買い物帰り、日中、モスクからの帰り道とお客——もつとも男性客のみである——が一日中絶えることはない。人々はこれを「コーヒーショップ・トーク」と呼んでいる。このコーヒーショップ・トークは「娯楽」であると同時に重要な生活情報を得る場所でもある。ここで政治の話題がとり上げられることもごく日

常的なマレーシアの農村風景である。

もつとも外国人にとつて、このお茶の時間には慣れるまでが大変である。言葉の音や語呂合わせによる冗談などにも精通しなくてははいけないし、時間を気にせずに彼らのいつ果てるとも分らない話についていかななくてはいけないからだ。

朝のお茶を済まし、ようやく次の娯楽探しへ出かけてみる。クアラルンプルで娯楽を考えたとき、まず最初に浮かんでくるのはゴルフ場である。

ゴルフ場はかつてのイギリス植民地支配の遺物であり、特権階級のシンボルの存在であった。しかし近年では第一に観光産業育成の重要な柱として、第二には近年の経済成長によつて勃興しはじめた都市中間層のステータス・シンボルとして需要が高まり急速に開発が進められている。一九九二年七月現在マレー半島部で営業しているゴルフ場は七一、さらに計画・建設中が四一カ所を数えると報告されている。¹⁾

近年の高度経済成長はゴルフ場開発以外にも娯楽産業に大きな変化をもたらしている。それは首都近郊に大規模なレジャー公園が民間のビジネスグループの手によつて開設されはじめたことである。公園の中には日本の大型遊園地によくみられるようなジェットコースターや大型プール、水族館、ゴーカート施設などがもうけられ、子供連れの親子で週末にぎわっている。こうした施設ができる以前は家族全員でバスケットを持って近くの公園や滝、河原などへピク

ニックへでかけるといふ光景をよく見かけた。少
しずつではあるがライフスタイルの変化を感じさ
せる。

夕方になると街では再びスポーツに興ずる人々
の聲が響いてくる。公共の集合住宅地には必ずス
ポーツ用のスペースがとられている。ここではバ
ドミントンやバレーボールの他にマレーシア独特
のスポーツ、セパタックロー（三人一チームとな
り小規模なバレーボールコートを使って遊ぶスポー
ツ）に興ずる若者たちが籐製のボールを頭と足を
使って奮闘している。

夜になると他の東南アジア諸国と同様にマレー
シアでもやはり「カラオケ」もしくは「KTV」
のけばけばしいネオンサインが光りはじめる。こ
れは大都市に限った現象ではなく、地方都市やち
よつとした田舎街でも眼にすることはできる。



ジョホール州、Batu Pahat Pahat Parit Kalong
Gantong 村調査アルバムより。

姿を消しつつある

「伝統的」 娯楽

都市から農村へと空間を移動しながらマレーシアの娯楽および娯楽産業を点描してきたが、現在、眼にすることができる娯楽の大半がイギリス植民地期、もしくはそれ以降にマレーシア社会に移入されたものになっていることに気がつく。

例えば冒頭で触れたスポーツの場合、イギリス人が十九世紀末期にクリケットを導入したことに始まる。その後種目もサッカー、バレーボール、ピンポン、バドミントン、ポロへと拡大し、第一次大戦後にはいずれの種目もかなり盛んに行われていたことが報告されている。このなかにはクリケットのように「宗主国文化」の象徴としてイギリス人植民地官吏が独占したスポーツもあった。しかし、その他の多くのスポーツはイギリス人地方行政官やイギリス型の寄宿制の学校を通じてヨーロッパ人からマラヤ半島に住む人々の生活へと浸透していった。この結果、一九四〇年代にはサッカーが最も盛んなスポーツとなり、各地で郡対抗戦が行われたほか、当時のマラヤ・カップ決勝戦には一万五〇〇〇人ももの観客が集まったと報告されている。

他方、伝統的な娯楽についてみると、全体としては姿を消しつつある。例えばマレー系住民の間には「ガシン」と呼ばれるこま回し、「グリ」と呼ばれる一種のビー玉遊びのようなゲームがある。しかしこれらの遊びは今日街で聞いてみると四十歳代以上の人々の「少年の頃には……」という思い出話の中のみ残っている。



“ジャワ”に起源をもつクダクパン。
お祝い時にしか見ることはない。

この他、今日でも眼にすることが
できるのは屋外の娯楽では前述
したセパタックローの他に、屋内
では「チョンカック (Congkak)」
と呼ばれる遊びである。

チョンカックは主として子供や
女性の遊びである。道具は通常長
さ八〇センチメートル、幅二〇セ
ンチメートル、高さ一五センチメ
ートルぐらいの木を船の形にくり
ぬいて作った板を用いる。この舟

形の木の前と船尾に当たる部分に大きめの穴を二つ、さらにこの二つの穴の間にカンポン
(マレー語で「村」また「故郷」の意味) と呼ばれるやや小さ目の穴を二列縦隊で一四個あけて
作られている。この一六個の穴に競技者(通常二人以上)が一人ずつ手持ちの小石(伝統的に
はゴムの樹の種子)を落としていく。手持ちの最後の小石をカンポン以外の両端の大きめの穴
に落として終わった場合には、その穴にたまっている小石をすべて取り上げて、手持ちの小石

としなくてはいけない。つまり手持ちの小石をカンポンの中に早く落とすきつた方がこのゲームの勝者となる。小石を穴に落とすというきわめて単純で、単調なゲームである。しかし日常生活において、特に大きな変化や新しい出来事に減多に遭遇しないマレーシアの農村の生活のなかでこのゲームの進行ぶりを見てみると、このゲームが生活のなかに見事にとけ込んでいることに感心させられる。まさしくマレーシア的な時間の流れを体現したゲームである。

この他に、伝統的な娯楽を探そうとすると、しばしば北部のクランタン州からは「ワヤン」と呼ばれる影絵芝居、凧上げ、南部のジョホール州からは「クダクパン」と呼ばれる踊りなどが代表的なものとして指摘されることが多い。しかし、これら伝統的な娯楽は庶民の娯楽というよりも、現在では「マレーシア的、特にマレー的なもの」を求める海外からの観光客とそれを売りものとする「観光産業」という二者の関係のなかにもとめるしかなさそうである。

多言語社会と娯楽

それでは現在都市と農村に共通して庶民の娯楽になっているものは何かと考えると、スポーツの他に重要なものとして、映画とテレビ番組を挙げるができる。

まず映画についてみよう。現在首都周辺部では映画館の料金は四から六リンギット（一リンギットは約四二円）である。地方ではさらに安くなり二・五リンギットから三・五リンギットとなっている。クアラルンプル周辺の場合、スーヴにはいった麺が一杯二リンギット程度で手

にはいることから考えて、二日分ぐらいの昼食代と
いったところであろうか。筆者が見聞した限り、映
画館は毎回若者を中心に満席状況である。

さて問題はどんな種類の映画を見ることができ
かということである。そもそもマレーシアにおける
国産映画の本数はきわめて少ない。図に示したとお
り、この三年間をみると国産のマレー語映画は三〇
本にみたない。一方、同時期に輸入された映画（た
だしテレビ上映をも含む）は毎年約六〇〇本内外に
も達する。この図から、輸入依存の状況がよく分か
る。⁽³⁾

マレーシアにおける最初の映画は一九三三年にシ
ンガポールで製作されたといわれている。本格的な
製作が始まったのは第二次大戦後である。特に四七
年にショー兄弟社によって映画会社が設立されて以
降急速に発展した。同社を中心に五〇年代から

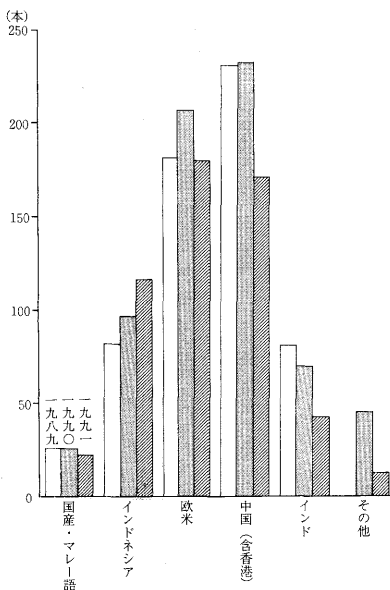


地方都市の映画館。左から中国映画、マレー映画とつづく。

六〇年代初期にかけての約十年が、マレーシア、特にマレー映画の黄金期といわれている。この間に製作された映画は約四〇〇本を数える⁽⁴⁾。この時期に活躍したP・ラムリーという俳優の主演・監督作品は今日でもなお高い人気をもって繰り返し再演されている。しかし六〇年代中盤以降は目立った発展をみず、インドネシアからの輸入に依存するようになり現在に至っている。

輸入映画への依存は単にマレー語映画に限ったことではない。図に示したように、華人系、インド系住民向けの映画もやはり基本的に輸入に頼っている。そのうち中国語映画はかつてはそのまま香港映画を意味していた。しかし近年では、中華人民共和国からの映画が少数ではあるがクアラランブルのみならず華人系住民の多いペナンなどの地方都市でも上映されるようになってきている。例え

映画フィルムの地域別生産・輸入数量



使用言語別テレビ番組放送比率 (1991年3月)

(%)

	中 文	タミール	その他
TV 1	0	0	100.00*
TV 2	25.21	15.68	59.11
TV 3	11.38	2.75	85.87
平 均	12.19	6.14	81.67

(注) TV 1のみ英語は含まず。

(出所) 『南洋商報』1992年7月7日付。ただし、この調査は華社資料センター、留台学会、中華大会堂・文化および教育グループなど華人系4団体が実施した調査に基づく。

ば筆者がマレーシアに滞在していた間(一九九一〜九三)には、コンリー(鞏俐)主演の「秋菊の物語(原題「秋菊打官司」)が日本とほぼ同時期に上映されていた。こんなところにも近年のマレーシア政府と中華人民共和国との関係の変化を垣間みることができる。

図は単にマレーシア国産映画の停滞のみならずマレーシアが多言語社会であることを改めて認識させてくれる。娯楽における言語問題は映画のみならずテレビ放送ではより深刻である。

マレー化する テレビ番組

マレーシアには現在国営二(TV 1)およびTV 2)、民営一(TV 3)と計三つの全国ネットワークを持つテレビ局が存在

する。

民間のある調査によれば、テレビ受像機を所有する家庭は二六三万世帯に達するという。これは全世帯の八九%(一九九〇年)にあたる。しかも二台以上所有する家庭は八%にも達する。種族別にみると華人系が最も高く九五%、次いでインド系九二%、マレー系八六%の順になっている。

問題はテレビ番組における使用言語である。連邦憲法の規定からマレーシアの国語 (National Language) はマレー語 (正式にはマレーシア語) と位置づけられており、番組も基本的にマレー語による放送が主体となる。

華人系の社会団体が一九九一年三月に行った調査によれば、使用言語別放送時間は表のようになっている。この表でいう「中文」とは基本的に北京語と広東語を意味する。しかし北京語によるニュース番組を除けば、広東語がその大半を占めているのが実態である。表の「そのほかの言語」はマレー語と英語を意味する。この二つの言語の内訳については、ほぼ同時期に公表された情報省の発表から推測することが可能である。それによれば現在TV1の番組の八〇%近くがマレー語による放送である。広告番組に限って言えば、完全にマレー語のみの放送になっている。またTV2の場合は四〇%がマレー語による放送である。実際のところ「英語」のみによる番組は数が少なく、基本的にはマレー語によるテロップがつくことが原則となっている。

さらに政府は「マレーシアの国語はマレー語である」という基本姿勢のもとに今後も番組のマレー語化を進める方針を打ち出している。情報省によれば、二〇〇〇年までにすべてのテレビとラジオの放送時間の八〇%をマレー語にすることを目標として掲げている。そして具体的には一九九二年の旧正月以降、TV2とTV3は中国語による放送番組を縮小する方針を打ち

出している。TV3の場合、九一年には全体の一二・五%を中国語の放送に充てていたが、九二年以降九%まで引き下げることとした。⁽⁷⁾

またテレビ番組のマレー語化と同時に番組内容それ自体の「マレー文化」化もしくはイスラム中心化が進んできているのが実態である。現在、金、土、日の三日間を除くと各テレビ局ともにおおむね午後四時過ぎに放送を開始し、十二時三十分頃に終了する。当然ながらマレー語による放送は午後八時以降のいわゆるゴールデンアワーと位置づけられる時間帯に置かれる。⁽⁸⁾ また金曜日ともなれば国立モスクからのお祈りの生中継を中心にして、それをはさむ時間帯にはイスラム関係のドラマやコーランの解説番組が放映されている。

このように言語、内容面をも含めたテレビ番組のマレー化はマレー系以外の華人系およびインド系住民に対し、テレビ番組の代替としてのビデオの利用を促すことにつながる。

先のテレビに関する調査と同じ調査によれば、ビデオデッキの普及状況はテレビ受像機保有家庭の三六%にあたる約九四万六八〇〇世帯に達するとされている。その内訳を種族別にみると華人系家庭が五三万六〇〇〇世帯を占めるのに対し、マレー系家庭はその半分の二六万四〇〇〇世帯にしかすぎない。もちろん種族による普及状況の違いは所得水準などの経済条件、ライフ・スタイルの嗜好などにも関係するが、テレビ番組のマレー化が非マレー系住民にとってビデオの保有を促した大きな一因であることは容易に想像がつくであろう。

ビデオデッキの普及を支えているのが、ビデオソフトの普及と入手の容易さである。日本と同様にマレーシアにもまた「ビデオ・レンタルショップ」が街角に多数存在している。そのなかでも大手の一つに数えられているあるチェーンショップの場合、入会時の保証金が六〇リンギット、一本のビデオのレンタル料金は四日間で三リンギットから五リンギットとなっている。さらにビデオデッキの普及に拍車をかけているのがいわゆる「違法コピー」によるビデオソフトの売買であり、その多くはレーザーディスクからコピーしたソフトである。「風と共に去りぬ」とか「ベンハー」などといった往年のハリウッドの名画に始まり、ごく最近の映画まで実に幅広い作品が扱われている。そのなかには日本のアニメーション・フィルムやウルトラマンなどの子供向け番組ソフトのように香港を経由して持ち込まれているものもある。これらフィルムは名画でも一本約一五から二〇リンギットときわめて安く売買されている。こうした違法コピーを取り扱う店はクアラルンプルの代表的なショッピングセンターの中をはじめ、歩道上に仮設屋台や露店形式で多数の店が軒を並べており、容易に入手ができる。

ところで、日本製の映像は単にビデオフィルムにとどまらない。近年ではテレビ番組にもまた連日といってもよいほどの頻度で日本製のドラマやアニメーションが放映されている。そのなかには、他の東南アジア諸国でもみられる「ドラエモン」といったもののみならず、NHKの朝の連続ドラマや某民放のいわゆるトレンドードラマといったものまでも含まれている。

こうしたテレビ、ビデオによる日本文化の浸透は都市部のみならず農村部の人々の「日本人像」に大きな影響を与えつつあるようだ。かつては日章旗と軍隊式の敬礼が日本人の代表的なシンボルであった。しかし今日マレーシアの農村部を歩くと子供たちが「はい！はい！」と威勢のよい声とともに日本的な「お辞儀」で迎えてくれる。

*

マレーシアの伝統的な娯楽は今日ではほとんど廃れ、近代的な娯楽にとって替わられている。一見すると日本の都市部でみられる娯楽とはあまり差異がないようにさえみえる。しかし、そうした娯楽のなかにも「多民族社会」というマレーシア社会の基本構造が如実に反映され、モザイク模様の体をなしているといえよう。

注(1) *Business Times* 紙、一九九二年七月二十五日付。

また一九九三年マレーシア観光開発公社が発行した資料によると、すでに営業しているゴルフ場が全土で九一カ所、一一五二ホール(うち、半島部は七八カ所、九九九ホール)。また建設中が三五カ所、八四四ホールにも及ぶ。

(2) 参考文献(1)および Khoo Kay Kim, "Sports and Investment," *Business Trends : The Annual 1993*.

(3) テレビ番組もまた輸入に依存している。一九九一年の場合、国内制作番組はわずか二六本

- しかないが、輸入番組は六五一本を数える (*Berita Harian* 紙、一九九二年十二月三日付)。
- (4) マレーシアの映画産業の記述については、参考文献(2)および(3)を参照のこと。
- (5) *Star* 紙、一九九二年五月二日付。
- (6) *New Straits Times* 紙、一九九二年八月三十一日付。
- (7) 『亜洲週刊』一九九三年三月十四日号。
- (8) 国内ニュース番組を例にとると、タミール語は午後五時三十分から六時(TV2のみ)、北京語は午後七時から七時三十分(TV2のみ)である。これに対しマレー語の場合、三局とも午後八時から三十分間放送される。

【参考文献】

- (1) John G Butcher, *The British in Malaya 1880 - 1941*, Kuala Lumpur, Oxford University Press, 1979.
- (2) FINAS (マレーシアフィルム開発公社)・*Cintai Filem Malaysia* (『愛そうマレーシアのフィルム』)・Selangor, 出版年次不明。
- (3) Ahamad Idris, *Film Melayu : Dahulu dan Sekarang* (『マレー映画——その過去と現在』)・Selangor, Marwillis Publisher Sdn. Bhd. 1987.
- (4) Ismail Hamid, *Masyarakat dan Budaya Melayu* (『マレーの社会と文化』)・Kuala Lumpur, Dewan Bahasa dan Pustaka, 1991.

(とりい たかし/アジア経済研究所動向分析部)